

特別講演

武道の比較文化論的考察

－ 武道に学ぶポストモダンの人間理解の可能性 －

魚住 孝至（国際武道大学）

日 時：平成 23 年 8 月 31 日（水）

13：30 ～ 14：30

会 場：A会場 1号館 1114 教室

武道は、日本において独自に展開した武術文化を基にして、19世紀末に西欧の近代スポーツ文化に学びながら、それに対抗して、〈近代的〉に再編して成立した運動文化と言えるだろう。

〈近代化〉の仕方は、柔道、剣道、弓道などによっても異なるが、大日本武徳会という統括組織が作られ、学校教育に導入されてから、一括して「武道」と呼ばれるようになった。武道は伝統文化と近代スポーツの両面を持ち、いずれを強調するかで、武道のあり様も大きく変化してきた。

競争原理に貫かれ、勝利至上主義に傾斜する近代スポーツ文化の諸問題がさまざまに顕わになってきた現代、現在の武道が出来上がるまでの歴史を改めて比較文化論的に見直しながら、ポストモダンの運動文化として、武道が持つ可能性について考えてみたい。

1. 武道の伝統- 近世の武術文化

16世紀後半から17世紀にかけて近世社会が成立する中で、新たな武士の文化として流派武術が成立した。士農工商の身分社会で、刀は支配階級である武士の独立の象徴とされた。〈弓・馬・剣・槍・鉄砲・兵法〉の流派が数多く生まれたが、剣術が中心であった。流派剣術では二人が組んで流派の形（勢法・組太刀）を学ぶ。相手との空間的・時間的な「間合」を問題にし、自分に有利な間合を取り、相手との間でのおのずから勝てる機を掴む。身心を研ぎ澄まして間合を見抜き相手が技を出す前に「先々の先」で勝つ。形稽古を積み重ねることによって、相手の太刀の下まで踏み込み、無心となっておのずから勝てる間合と機を身心一体で知っていく。多くの武芸者がそれぞれの理論・教授法による流派を立てたが、『兵法家伝書』、『五輪書』等、将軍や大名の周辺で、禅僧や諸芸の名人との交流の中で、高度な理論書が著された。合戦を知らない世代の武士教育として展開した。実際には人前で刀を抜くことはなく、刀は内面化され、心法論も展開した。武術以上のものを問題とする近世の武術伝書の内容には、今日も学ぶべきものも多くある。

2. 武術文化の革新- 近世後期に始まるプレ近代

人口は17世紀初頭の約1200万人から18世紀初頭には約3100万人にまで膨張し、社会も変容する。18世紀初期から防具を着け、竹刀で打ち合う撃剣が工夫され、後期から本格的に展開した。撃剣は流派剣術の理念を持ち、形稽古を吟味するという意味づけだったが、次第に打ち合うこと自体が盛んになる。竹刀は刀だと観念され、「一刀」で切れなければ有効ではない（当るだけでは「一本」ではない）とされた。武術奨励もあって浪人・郷士・豪農層が担う新流派が多く出来る。他方、撃剣は刀法を崩すとして批判し、流派の形を稽古する武士も多かった。柔術においては、17世紀末から18世紀にかけて、当身や極めの形をほぼ除き投げの形を主とする起倒流が幕閣から三都の下級武士・町人層も含んで展開し、この中で乱取りも盛んになった。逆に当身や極めの形を整備した真之神道流も生まれ、幕末の天神真楊流へと繋がる。

撃剣では他流試合が可能となり、19世紀初期、諸国武者修行が流行し、中期には、江戸の撃剣町道場が繁栄、諸藩の武士の交流の場となる。藩校の剣術教授方にも進出し、撃剣は、境界身分の者が武士となれるルートであり、武士としての素養を積む場でもあった。幕末、幕府が設立した講武所では、流派を越え、竹刀の長さを統一して試合稽古し、近代剣道に繋がる。維新により武士階級が解体され、流派武術は終焉した。近代武道の成立基盤として、近世後期からの武術

のブレ近代の過程を研究する必要がある。

3. 剣道・柔道・弓道の〈近代化〉

明治初期、文明開化の中で旧来の武術家は窮迫した。明治10年の西南戦争における抜刀隊の活躍以降、警視庁は柔術・撃剣の世話係を採用するようになった。明治15年(1882)、山岡鉄舟は春風館を設立、一刀正伝無刀流として、禅と武士の精神を合わせた剣術指導を始めた。同年、嘉納治五郎は、講道館を設立、以後数年かかって、投げ技主体の起倒流と固め技中心の天神真楊流を合わせて大胆に組み換えた講道館柔道を作り上げた。形稽古による柔術を、危険な技を除き、乱取り中心で試合形式も取り入れて近代化した。明治22年、嘉納は、柔道は「体育法・勝負法・修心法」の教育的価値を持つと講演した。同年、本多利実は弓道の練習所を開いている。明治22年は、大日本帝国憲法発布の年で、明治国家体制が固まった時期であった。明治28年(1895)、日清戦争に勝った昂揚感の中、京都に大日本武徳会が設立され、10年後の日露戦争に勝利するまでに急激に組織を拡大した。毎年、剣・柔・弓などの演武会を開催、範士・教士の称号と年金を授け、さらに流派を越えた形を制定した。武道を学校教育に導入するよう国会に繰り返し建議されていたが、明治44年(1911)に中学校でも柔道・撃剣を教えるようになった。翌年から東京高等師範と武徳会の武術専門学校が教員養成をして、集団教授法が工夫された。1924年から、全国規模のスポーツ競技会で国体の前身となる明治神宮大会が始まったが、武徳会は「武道は勝負を争うことを本旨としない」と当初不参加だったが、やがて参加した。昭和4年(1929)の天覧武道大会を機に試合ルール・審判法を整備し、競技会が盛んになったが、武道の競技化には危惧する声も多くあった。

4. 戦後の武道- 競技化と国際化

武道は戦時下に軍国主義化されたので、昭和20年(1945)の敗戦後、武道は一時禁止された。戦後の武道はスポーツ化・競技化を著しく進めて復活した。一時期“撓競技”も考案されたが、昭和28年に剣道に戻り、武道も学校教育に復活したが、「格技」という名称だった。各連盟が組織され、柔道では国際連盟も出来た。1964年の東京オリンピックでは柔道が正式種目となり、以後世界中に普及することになる。同年、日本武道館が設立され、以後武道を統括・推進する。1970年代以降、他の武道の国際化も本格化した。現在武道9団体はいずれも国際連盟を持ち、各国でそれぞれに受容され、変容されつつ展開している。

5. 武道に学ぶポストモダンの人間理解の可能性- 奥の深さの追求へ

現在の武道が抱える大きな問題は武道人口の減少である。様々な原因があろうが、武道が戦後、伝統性や精神性を十分に考えることなく、競技性のみを追求してきたことが大きいのではないか。

近代の武道史を振り返ると、競技志向が強まった1920年代後半、嘉納は柔道の〈上・中・下〉を論じ、競技だけでなく、稽古で得た内容を生活の中に活かし、さらに世に補益することを強調した。植芝盛平は宇宙的な合気を言い、試合を否定した。剣道の山田次朗吉は、競技には見向きもせず、流派の形を教え、武道伝書を整備した。弓道の阿波研造は的中を問題にせず、一射の中の集中を問題にした。阿波の教えを受けたE・ヘリゲルの『弓と禅』(1948)は、①力を抜いて全身一体で弓を引く、②呼吸に集中し札法を行じ、無心となって離れの機が熟するのを待つ、③的を狙わずに無心となって射る(意識的な技とは違って清々しい体感があっておのずから中る)、④無心の射の境を日常生活に及ぼすべきことを書いている。この哲学者は弓道修行によってもたらされた「実存の思わざるあり様」に驚いている。また梅路見鸞に弓道指導を受けたK・デュルクハイムは『Hara(肚) - 人間の中心』(1967)を著し、心身二元論的な西欧の人間理解とは異なる人間のあり様が、武道や禅の修練の果てに生まれることを論じている。先人の教えに学びながら、自ら修練する中で開かれる武道の奥の深さを見出し、武道の魅力を伝えていくべきではないか。

【講師紹介】1953年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。博士(文学)。現在、国際武道大学教授。武道・スポーツ科学研究所長。主な著書『定本五輪書』(新人物往来社)、『宮本武蔵』(岩波新書)。